

妙円寺団地住宅祭は成功裡に終了した 主催・後援・出展者として四氏にその 感想をいただきました



妙円寺団地と住宅祭

鹿児島県住宅供給公社常務理事 内木場 勤

妙円寺詣り——鹿児島県三大行事の一つ。

慶長五年（西暦一六〇〇年）旧歴九月十四日。関ヶ原敗戦の苦難をしのび、島津義弘公の菩提寺妙円寺（徳重神社）まで、鹿児島市から往復八里を夜行軍する。今なお盛大で小学生から一般人まで多数参加する。当日は境内で武道大会等が催される。（今年は10月23日）

伊集院妙円寺団地住宅祭は、この妙円寺詣りの勇壮な若武者が、
「時代を越えて、何ができるか」という問掛けに始まっている。

妙円寺団地は、鹿児島県住宅供給公社が、鹿児島市のベッドタウンとして昭和四十三年から開発してきた大規模住宅団地で、鹿児島市の北西約二十キ

ロメートルに位置する。

ここに、伊集院町の絶大なご協力を得て、魅力ある理想的団地を形成すべく、公社として全力を傾注してきた、言わば「虎の子」の団地である。従ってこの団地には、豊富な緑の空間構成のもとに、ゆったりとした宅地（平均九十坪）を計画し、飲料水はすべて地下水、生活汚水は公共下水道と、団地全体が清浄な空気に包まれた安らぎのある団地づくりが試みられている。

しかし、これ等のことは開発者側の言い分であって、入居される側から見ると、果たして額面どおり受止めてくれるのか。これからこの団地が長い年月に亘って、住み込まれた人達の手によって、町を立派に育てたいという自浄作用が行われるのか、逆に環境悪化への自壊作用が働くのかは疑問である。

そこで、この町はこうありたい——という開発者側の理念を一步進めて住宅分譲の当初から入居者に対して町づくりの意識を強調する必要がある。ここに、本県公社が住宅生産振興財団の企画により実施された住宅祭の中の新しい町づくりの姿勢に共鳴し参加したのである。

さて、冒頭の設問に対して、参加十三社はいかなる答を準備したか——。そして成果は——。

つらなるみどり、つながるころをキヤッチフレーズとしたこの住宅祭も間もなく終わろうとしている。起工式以来六ヶ月参加十三社一丸となって同じ目的の為一糸みだれず、互いに協力

を惜まず、日夜努力された甲斐があつて、連日の人出を呼び素晴しい好評を得ている。

反面、地方の風土に適した住宅のあり方という点で、反省の材料が幾つか出ており、これ等の点が改善されてこそ、地方における良質な住宅の供給の実現が期待される。

いずれにしても関係者一同の願いは「思わず住んでみたくなる家」であり、

住んだら、他人に誇れる町！
でありたいということである。公社としても、今回の住宅祭で学んだ貴重な経験を活かして、今後の団地づくりに、積極的に努力する考えである。



妙円寺住宅祭に参加して

鹿児島県木材協同組合住宅課長 米重正一

台風一過、見渡す限りの青空のもと大多数の住宅祭参観者を目的のあたりにして、住宅祭が大盛況のうちに開幕でき、今正直、ホッと一息ついたような気持ちです。例えば妙円寺住宅祭は、諸々の準備段階より「梅雨時長雨」の中の「工程見学会」、開会式前日の台風襲来等多くの紆余曲折の中で進行し何とかオープンにこぎつけた訳ですが

台風十三号がそれらの全てを、洗い流してくれたようなもので内外での「住宅祭」の反響を耳にすると、微力ながら「住宅祭」の運営にたずさわってきたものとして喜びを感じます。

当初、私みたいな若輩がこのような大役を果して全うできるか多に疑問でしたが、小廻りのきく役割りも当然必要かと、考え新たに参加して参りま